



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	赤津隆助の図画教育思想とその実践(論文要旨)
Author(s)	増田,金吾
Citation	
Issue Date	2018-03-16
URL	http://hdl.handle.net/2309/150889
Publisher	
Rights	

氏 名 : 増田 金吾
専攻分野の名称 : 博士 (教育学)
学位記番号 : 博乙第 95 号
学位授与年月日 : 平成 30 年 3 月 16 日
学位授与の要件 : 学位規則第 4 条第 2 項該当 論文博士
学位論文名 : 赤津隆助の図画教育思想とその実践

論文審査委員 : (主査) 教授 山田 一美
(副査) 教授 小野 康男 教授 橋本 美保
教授 清野 泰行 准教授 内田 裕子

学位論文要旨

申請論文「赤津隆助の図画教育思想とその実践」は、戦前、東京府師範学校、東京府青山師範学校、官立東京第一師範学校（以下、これらをまとめて青山師範学校と言う）において図画教育を行い、多くの優れた美術教育家を育てた赤津隆助(1880～1948)の図画教育思想とその指導法に基づく実践を精査し、その思想や指導法の特質と美術教育史的意義を検討したものである。赤津は、美術教育史上著名とは言えないが、研究対象に値する人物であると捉え研究を行った。論文は、序章、第 1、2、3、4、5、6 章、終章よりなる。これに資料 1、2 を付している。

序章では、最初に本研究の目的と意義について述べた。次に赤津隆助の執筆活動について全容を示し（著書・論文数は 220 を超える）、年代別執筆の変遷について概観した。そして、先行研究並びにその問題点、研究の方法、本論文の構成を示した。

第 1 章では、赤津隆助が青山師範学校卒業までに受けた教育について調べ、論じた。最初に赤津が師範学校入学までに受けた図画教育について精査した。これによって、一地方（赤津の出身地福島県）のことではあるが、明治 20 年代の小学校を中心とした図画教育の実態が明らかになった。また、当時赤津が学んだ図画の教科書を特定し、その主なものの一つ『日本画鑑（かがみ）』について検証した。そして、明治時代中期から後期にかけて赤津が師範学校時代に受けた教育について、その状況を明らかにした。師範学校の 3 年生まで図画の授業では、写生・図案・創作などは一度も指導されず図画に魅力を感じなかったが、4 年で指導者が替わり実物写生をするようになり面白味を感じたという。

第 2 章では、赤津隆助が教師となって間もなく大きな影響を受けた白浜徴との関係について触れた。そして、赤津が青山師範学校附属小学校において行った教育について精査した。その結果、明治後期の青山師範学校附属小学校の教授細目等における図画指導の実態が明らかになった。また、青山師範学校附属小学校図画科の国定教科書への対応の実態を明らかにした。第一期国定教科書（期の時代区分は、山形寛による）だけでなく、第二期国定教科書の一つ『新定画帖』も詳しく調査した上で赤津は青山師範学校附属小学校で（また本校においても）これを使用していなかった、ということが判明した。それは、赤津自身の公的な記述（『新興美育』1937）、青山師範学校附

属小学校編『尋常小学各科教授細目 第三編』(1911)などから判断できる。教科書不使用の背景には、校長滝沢菊太郎や主事の理解があったと推測できる。『新定画帖』教師用書は参考として用いたが、青山師範学校附属小学校独自の教授細目で指導していたのである。

第3章では、赤津隆助と師範学校教育について精査した。明治時代後期から昭和戦前期までの師範学校教育の検討、明治期・大正期・昭和戦前期の師範学校における各時期の教育の比較、明治時代後期から昭和戦前期までの青山師範学校の教育についての検討、を行った上で、授業における赤津の図画の指導法や評価法を明らかにした。赤津の、図画の指導の主な特徴は、個性を尊重し創造主義の立場に立つ写生を中心としたものであるが、背景には造形主義に基づく指導法や生活主義に基づく理念があった。さらに、赤津の指導の特徴である寄宿舎等、教室以外での教育を含む全体的な教育について考察した。

第4章では、赤津隆助の制作活動等について調べ、論じた。最初に赤津の絵画作品を示して制作の実態を明らかにした。次に、赤津の作った教科書について触れた。そして、世界の主要都市を巡り、各当局や斯界の有力者と会見して、携行した児童生徒作品等の贈呈や展覧会開催の交渉を行い、帰国後は欧米図画教育の実態を紹介するなどの成果を残した赤津の外国出張について明らかにした。その他、幼児教育にも赤津が貢献したことについて触れ、論述した。

第5章では、最初に赤津隆助を巡る美術教育思潮の概略を述べた上で、(1)創造主義に関わる山本鼎の自由画教育との関係について、山本の目的論には賛成するが山本に方法的改造案を望むのは無理と赤津は捉え、また山本の極端なもの言いと具体的な教授法の無視を批判したこと、(2)造形主義に関わる新図画教育会との関係について、赤津は物の形や色を通しての造形芸術陶冶の重要性を述べ、新図画教育会を通じて造形主義美術教育に基づく明確な指導法を示したこと、(3)生活主義に関わる想画との関係性については、地方色豊かな自己の環境としての生活観と自主性、すなわち子供たちの見た生の声を認める捉え方をしたことなど、赤津の考えを描出した。

第6章では、赤津隆助が育てた美術教育家たちについて述べた。代表的な卒業生の3名、武井勝雄・倉田三郎・箕田源二郎について分析・考察した。3名の中には、赤津の教えが皆生きていて、それが大きく成長している姿を明確に示すことにより、赤津の図画教育思想とその指導法の有効性が検証できたと見えよう。

終章では、結論を記した。赤津隆助は、山本鼎よりも早い時期に写生を中心とした個性尊重の創造主義美術教育を行い、新図画教育会を通じて造形主義に基づく明確な指導法を示し、想画教育すなわち生活主義美術教育の発展に尽くした。最終目標は心の教育(人間教育)であった。赤津の図画教育思想は、視野が広くかつ一点に集約される強固なものであり、当人はそれを実践していた。赤津は、戦前期における美術教育の指導法を確立していた、と言える。